

対話がもたらす、偶然の Play

——胡桃澤伸の
臨床と演劇作品たち



●精神科×演劇の先駆者

精神科の関係者で演劇といえば、真っ先にこの方の名前が追いつかぶ人にもいるかと思います。そうです、精神科医で劇作家の胡桃澤伸さんです。この度、編集部は、胡桃澤伸さんと批評家の西堂行人さんによる、偶然を基点に創作と臨床の現場を行き来する対談の記録を拝見する機会を得、それを紹介する了解をいただきました。胡桃澤さんはこうおっしゃいます、「演劇もスポーツも診療もすべては遊び（Play）だ」と。紙幅の関係で、全文を雑誌に掲載することがむずかし

いため、Webマガジン「かんかん！」にて公開します。以下のような3部構成になっていますので、ぜひ3部合わせてご覧ください。



第一部 臨床も創作も対話から立ち上がる

〈あらすじ〉精神科医と劇作家という二つの視点から、対話の中で生まれてくるものの重要性を考える。ポイントは聞き手（ワキ）の存在で、話し手（シテ）と聞き手（ワキ）のズレの間に新しい発見の可能性が存在する。そして、遊びを失った人に再び自由に動ける余白を取り戻す営みが、演劇と医療に共通する使命である。

第二部 他者をわかるということ

〈あらすじ〉共感という言葉の認識を改めることで、他者をわかるとはどういうことか、また、わかったときに何が起こるのかについて思索する。



胡桃澤伸（くるみざわ しん）

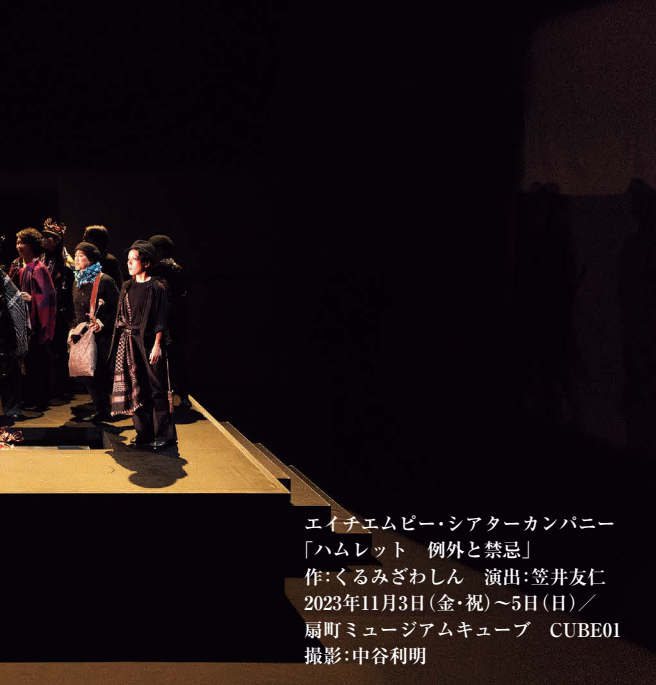
精神科医。劇作家。1966年長野県生まれ。

1995年、阪神淡路大震災直後の神戸で精神科医として勤務を開始。以後、大阪、東京、千葉で勤務。2003年から、北区つかこうへい劇団戯曲

作法塾、伊丹想流私塾で劇作を学び、「くるみざわしん」の筆名で劇作家として作品を発表。放射性廃棄物の最終処分場をテーマにした『同郷同年』で2016年「日本の劇」戯曲賞最優秀賞と2018年第25回OMS戯曲賞大賞を受賞。古典を現代思想の観点から改作した『忠臣蔵・破 エートス／死』が2019年文化庁芸術祭賞新人賞を受賞。単著に精神科医としての勤務経験を作品化した『精神医療連作戯曲集／精神病院つばき荘・ひなの砦』、2011年の東電福島原発事故後の世界を作品化した『反核・反被曝連作戯曲集 同郷同年／蛇には、蛇を』。共著に『中井久夫講演録統合失調症の過去・現在・未来』（以上、いずれもラゲーナ出版）。編著に『安克昌の臨床作法』（日本評論社）がある。

第三部 レールの上でなく、偶然の上に行く公演活動と日々の創作

〈あらすじ〉ゲリラ的に公演を行っているのはなぜか。予定を決めず、偶然に場をひらいているからこそ、役者・スタッフとの出会いがあり、日々の執筆が続けられる。それは臨床においても同様である。



エイチエムビー・シアターカンパニー
「ハムレット 例外と禁忌」
作:くるみざわしん 演出:笠井友仁
2023年11月3日(金・祝)~5日(日)／
扇町ミュージアムキューブ CUBE01
撮影:中谷利明



西堂行人 (にしどう こうじん)

演劇評論家。2023年3月まで明治学院大学文学部芸術学科演劇身体表現コース教授。1990年代以降大学で演劇教育に関わり、近畿大舞台芸術専攻教授(1998~2016)。専門は60年代以降のアンガラ・小

劇場演劇。および日本／世界演劇史。2006年より現在まで伊丹アイホールで「世界演劇講座」を開講。主な著書に『演劇思想の冒険』『ハイナー・ミュラーと世界演劇』『劇的クロニクル』『韓国演劇への旅』『現代演劇の条件』『蜷川幸雄×松本雄吉 二人の演出家の死と現代演劇』『日本演劇思想史講義』『ゆっくりの美学—太田省吾の劇宇宙』『新時代を生きる劇作家たち』『日本演劇史の分水嶺』他多数。大学生との共編著に『近大はマクロだけじゃない』『コロナ禍を生き抜く演劇論—学生が見た2020／2022ドキュメント』がある。最新刊に、『新版 日本のアンガラ』がある。

●偶然はおもしろい

本誌でも2024年11月号で「身体を使った対話“演劇”がケアになる」という特集を組み、本年9月号では「“偶然性”に本質を見出す人たち」という特集を企画しました。この2つの特集、どこか同じにおいがないですか？

発端は、9月号の“偶然性”特集にも寄稿いただいている高木俊介さんからのこんな一言でした。「医療もケアも偶然だよ。そろそろ『精神看護』も正面から偶然を扱ってみたいと」。そこからです、1年にわたる偶然との戦いが始まった

のは……。

「偶然」「偶然性」「必然」「ケア」「医療」「精神科」等のキーワードで論文を検索し、ヒットしたものすべてに目を通すところから始め、糸口が見つからぬまま、その著者の他の論文を検索し、九鬼周三の『偶然性の問題』をがんばって読んだりもして……で、ここで挫折。真正面から偶然に挑んだ結果、見事にはじき返されました。誰に何を書いてもらえばいいか、ただの1案も思い浮かばず、立ち往生。

そんなときでした。編集部に通のメールが届いたのは。差出人は、本誌で連載「ベルリン演劇留学記——演劇とケアの濃密な時間」を執筆いただいている野村真人さんです。メールには、「訪問看護師とその息子による演劇を上演するので、もしよろしければ観に来てください。演じるのはご本人たちです」というお誘いが書かれていました。訪問看護師の演劇か、けっこう面白そうだな、でもなんであえて本人が演劇を……って、そうか演劇か！ 光が差しました。以前「演じる」という行為は中動態であり、「する」「される」の世界から解き放たれた場から、自由が偶然に立ち上がってくるという企画をWebマガジン「かんかん！」で担当したことがありました(「演劇における中動態の世界——演じるという態」、松村武、2018)。あのときの続きで、演劇を手がかりに偶然を考えれば、自由を経由して偶然とケアが出会いそうだなと。ならば、まずは演劇を掘り下げようではないか。

そんな経緯で偶然と演劇を取り上げるに至ったわけですが、一連の企画のアンカーを胡桃澤さんと西堂さんの対談に託させていただきます。なぜなら、偶然と演劇について、本誌のメインテーマでもあるケア、対話を含めた話題として見事な一貫性を持って扱われているからです。

それでは、お2人の対談をお楽しみください。

(本誌編集部：金子力丸)